ルワンダ通信⑤最終（トビタテ生の北村さんの活動レポート）

アフリカ・ルワンダに留学した、北村美月さんが帰国後に書いてくれた最終レポートを、ご紹介します。
北村さんは、12 月 15 日（木）の報告会で話し手として登場しますので、お楽しみに！

＊＊＊

ルワンダと日本、「途上国」と「先進国」

帰国してからずいぶんと時間が経ってしまったのですが、ルワンダ留学の締めくくりとして最終レポートを書かせていただきました。自分の気持ちを言葉で表現するのは得意ではないのですが、ぜひみなさんに伝えたいと思ったので読んでいただけたら幸いです。

ルワンダで留学していたと言うと、必ずと言って良いほど「アフリカって、やっぱり生活する大変だったでしょ？停電とかはどうだった？」と聞かれます。確かに、停電で真っ暗闇の中ご飯を作ったり、断水でトイレが流れなかったり、お風呂はお湯が出ないので水シャワーだったりと、みなさんがイメージするような「途上国」の生活を送っていました。しかし、1 年間も暮らしているとそのどれもが当たり前になり、今振り返っても辛いと感じたことはありませんでしたし、むしろ毎日何かしらが起こる生活を楽しんでいました。中でも一番のハプニングは、朝になったらなぜか部屋の鍵が開かなくなっていて、閉じ込められてしまったことです。（笑）私はトイレに行きたいのを我慢するのに必死で、ハウスメイトのルワンダ人とコンゴ人が何とかドアを壊してくれて、無事に脱出することができました。鍵の質が悪いのが問題だったのだと思いますが、こんな日本では絶対にありえないような事件もこの記事を書くまですっかり忘れていました。そのくらい、ルワンダでは小さな出来事にあふれ、当たり前の決まりきった毎日がありません。パソコンの充電がなくて課題ができないでいたときにタイミングよく電気が戻ってきたり、レストランで私の大好物のプランテンバナナがその日はたまたまメニューにあったり、いつもは硬いパンが柔らかかったり…そのような小さなことで幸せを感じることができる生活が大好きでした。

私が 1 年間ルワンダで暮らして考えさせられたのは、「途上国」と「先進国」とは何かということです。「途上国」と呼ばれる国の生活は、みなさんが思っているよりもはるかに不便で大変なものではないのです。私の留学中の目標のひとつが、現地になじむことでした。現地人しか入らない薄汚いレストランに行ってみたり（実際、ここが一番美味しかったです）、よく歩くルワンダ人に倣ってタクシーは使わずに多少の距離でも徒歩で移動したり、ルワンダ人向けのヘアーサロンに行ってみたり、15 円均一の古着の山をあさって洋服を買ったりと、できるだけ多くの現地の生活を経験しようとしました。そのような私に対してルワンダ人は、最初は驚きつつも外国人としてではなくきちんと対等に接してくれました。他の国では見た目で判断されて何もかも外国人価格を言われてしまいますが、ルワンダは違います。最初は高い値段を言ってきても、キニャルワンダ語と呼ばれる現地語で「高すぎるよ、安くして」と言うと、「ルワンダ語できるのか！お前は友達だ！」と言って現

地人価格で売ってくれましたし、中にはタダで野菜をくれる人もいました。大学の友達にも同じことが言えます。日本人で自分たちよりもお金を持っていることは知っているはずなのに、私はいつもおごってもらう側でした。初めから 1 人のクラスメイト、友人として受け入れて接してくれた友達にはとても感謝をしています。

留学に行く前から、日本人だから偉いだとか、先進国だから立場が上というような考え方に違和感を覚え、留学中はルワンダ人と対等な関係で接したいと思っていました。しかし、そのような上下関係をつくってしまっているのは、先進国の人々が偉そうに接しているという理由だけではなく、途上国と呼ばれる国の人々が先進国の人々を「外国人」として扱っているからでもあるということに気付きました。また、先進国側が思っているのと同じように、途上国側も自分たちは貧しくて力や才能がないと過小評価してしまっているのも確かです。しかし、そのような国にも魅力はたくさんあります。大きなポテンシャルを持っています。漠然と「国際協力」やアフリカと関わる何かがしたいと考えていましたが、留学を通じて「アフリカの現地の人と一緒に、彼らの魅力や潜在能力を活かせることがしたい」と将来のビジョンが少し明確になりました。実際に行ってみなければできなかった経験、知ることのなかった現状、そして感じ、考えることのできなかったこと。すべてが私の宝物です。

（国際社会学部アフリカ地域専攻 3 年　北村美月）

日時: 2016 年 12 月 13 日